

機

大城邦義

人(仏)に遇い、法に遇い、自己自身に遇う。そこに「帰依仏・帰依法・帰依僧」の成就がある。それが救いである。親鸞における仏教の事実は「帰」の一点にある。そして、そこに明らかにされてくるのは「機」ということである。三宝、就中「僧宝」に召されつつ生きている中に深信知されることは「機」ということなのである。

たまわりたる聞 「今、私にとって真宗とは何か」とある所で問われたのであるが、私に直ちに発起したことは「浄土の真宗」ということであり、「宗教の事実としての浄土真宗」ということである。そしてその具体的内実は「聞」である。端的に言って「教えを聞く」ということである。私に「真宗」は「聞」の一事として今現在する。

「聞の一字は小乗教と他力教とに通貫の至道であり、又やがて宗教の根本の道である」

(曾我量深論集第二卷『地上の教主』四九ページ)

「聞」それは「経」を「教」として領く一点であり、まさしく「宗教としての仏教」・「浄土の真宗」を開く鍵である。「聞」において展開してくる「聞の教学」こそ浄土真宗の教学である。宗教としての仏教、宗教の真実を明らかにする仏教学、即ち真宗学である。「本願」を明らかにする「本願の教学」である。『歎異抄』は言う。

「学問せば、いよいよ如来の御本意をしり悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかなんごとあやぶまんひとにも、本願には善悪淨穢なきおもむきをもとききかせられそうらわばこそ、学生のかいにてもそうらわめ。」

(第一二条)

かく人間に「宗」を明らかにするものこそ、学仏大悲心と言われる学仏道であり、それはまさに「たまわりたる聞」に始まる仏弟子の教学なのである。

機 さきの「今私にとって真宗とは何か」という問いに含まれている「今」「私」「真宗」という三つの確認点は、親鸞が明らかにしている「機」の内実である。即ち、

今……………時

私……………場(宿業)——機

真宗……………法

「時」と「場」と「法」とが因果同時に成就する、その一点を「機」と言うのである。故にその「機」とはたとえれば「点」であり、決して「面」として固定することはできない。まさに「今」という「時」を内実とする厳肅さである。「念仏もうさんとおもいたつところのおこるときすなわち」と言うが、その呼吸は人間の生身の呼吸の如きもので決して固定化、実体化できない。故に同様に「機」のもう一側面である「場」(宿業)ということも、「いずれの行もおよびがたき身」と言うが、その内実は「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもす」ということであって決して固定化、実体化できない。故に「法」も実体化することはいできない。「法」の現行といっても、衆生に「今」という「時」と「宿業」という「場」を開き、自覚せしめる以外の何ものでも

ないからである。故に先の図は



ということになる。「法」は衆生に「時」と「場」を教え、穢土を生き尽くす道と成る。それが「機」の成就である。そこに「真宗」がある。「今」を教え、「今」を生きる「宿業」を教え、開く。それが「本願」の表現であり、「本願」の「機」の成就である。廻向、衆生に「今」が開頭される。それは「本願」が「とき」として名告ったのである。それが「行の一念」と言われ、その内実が「信の一念」と言われる。「本願」の「とき」である。「今」が開頭されることは同時に「宿業」が現行することである。「本願」の「宿業」の現行である。「本願内宿業」である。「本願」は衆生に「場」(宿業)を開く。それが宿業の自覚である。まさしく「自身」の位置が明らかになることである。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」

(『歎異抄』第十九条)

「親鸞一人がためなりけり」、これが「本願」の「場」の開頭、現行である。まさしく「本願」が「場」として名告ったのである。ここに、「深信」と言われる事柄がある。「深信自身」である。

「深信」は機法二種深信と言われるが、開けば「七深信」である。それは「深信自身」に始まり、「建立自心」に括られる。即ち「機の深信」中に「法の深信」は独立して撰せられているのである。たしかに、「機」は「法の機」であり、「法」から生れ、「法の機」となったのであるが、蔽密に押えれば「法」が「機」

となったのであり、「機」として、「法」が用いている事実しかないのである。「機」として用く「法」の展開、それが七深信の内容である。

親鸞教学の核 古来から『観無量寿経』は「機の真実」を明かすと言われている。それは、本願における救済の自証が明らかにされている、即ち法の機が明らかにされているということである。善導大師は『観無量寿経』を「六字釈」と「二種深信」の二点で押えてその精神を明らかにしたのであるが、実はその二視点こそ宗教の真実としての浄土教のいのものである。親鸞教学の核である。先に、「本願」が「時」として名告ることを「行の一念」「信の一念」と述べたが、この「六字釈」こそその「行信」の一念が生まれてくる母胎である。「本願」が「時」として名告る、そこにおいて「本願」を「時」としてたまわる、それが「南無(阿弥陀仏)である。「本願」の名告りは「時」である。

そのとき同時に「場」(宿業)が自覚される。「時」が自覚され、「場」(宿業)が自覚される。「阿弥陀」の「時」であり、「阿弥陀」の「場」である。「時」と「場」として「阿弥陀」を知る。即ち「自身」が「時」に生き、「場」に生きてあることを知る。

それ、分限の自覚である。かくして「六字釈」の中に「深信」は学まれており、「六字釈」から「二種深信」は生れてくるのである。衆生が「阿弥陀」の「時」に目覚め、「阿弥陀」の「場」に目覚める。そのとき、「たまたま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」と「機」の純熟成就を「宿縁」として頷くのである。そこに現行することはただ「帰命」の一事である。それは、ただ「聞」を立場とするところから開かれてくることである。

※ 『親鸞教学』第三十八号・三十九号拙稿「機」参照